

ローティにおける認識論から解釈学への転回は何を導くのか？

岡山理科大学 入江祐加

近代以降の西洋哲学は、認識論によって支配されてきた。この「認識論としての哲学」は、いかにしてよりよく認識するかを知ることで人間の有限性、不完全性を超え、対象そのものを客観的に捉えようとするなかで形成されてきた学問である。実際、認識論的基礎づけには、人間が自らの知を客観的に捉えてきた過程が集積している。その前提には客観的に見ること自体が根源であるという考えが表されており、知そのものが見ることによって規定できるという前提が表されている。

人間は正確な認識を目指すことによって、主観的なものをできるかぎり排除し、主観的な認識から生じる誤謬・偏見を取り除き、それによって、客観的真理に到達しようとしてきた。諸学問の到達すべき理想は見ることによってみえてくると認識論的基礎づけは考えていた。だが、ローティは、『哲学と自然の鏡 (Philosophy and the Mirror of Nature)』の中で、自分の外にある何かを正確に映しとり、対応させる「鏡」という視覚的隠喩を用い、それを破壊することを通して、認識論的に捉えられていた「心」「知識」「哲学」という概念の解体を行う。

確かに、鏡は現前にあるものを知覚させる。逆に言うと、現前しか映し出さない。だからこそ鏡の前に対置されることには重みがあり、認識論はあえて「心」や「哲学」を鏡に映してそれと対峙しようとしたのである。しかしそれを知覚することとそれを顕在化することとは違う。心や哲学を顕在化することとは、事実として限定された対象の独立存在を具体的に捉えることである。言い換えれば、それは個々の本質が具体化して現前していることを内面的に認めることである。すなわち、ローティが認識論的基礎づけにおいて、見ることを否定するのは、説明できない非合理的存在のあり方を現代において認めるためであり、「鏡」のような写像で感覚し、知覚することでは確証が与えられないものを人間のなかで認めるためなのである。

認識論的基礎づけにおいて、人間は主観と客観を分離させ、客観の方から人間自らの知を根拠づけようとしてきた。そこにおいて、人間は、現前している外部の世界を可能な限り詳しく精査することを考えてきた。ここで問題なのは、こうして生まれた認識が知覚成立の物理化学的説明でしかないという事実であり、自分が見聞きするという主観的心理体験がいつのまにか除外されているという事実である。こうした問題をふまえたうえで、本発表は、現代哲学において、主観性を主観性そのものとして認める領野がいかにして広かれるかをローティにおける認識論から解釈学への転回を追うことを通して具体的に考える。その際に重要なのは、認識論から解釈学への転回における叙述において、ローティが哲学の終焉を具体的に意識していることである。しかし、「終焉」とはいつても、ローティ自身が解釈学という新たな方法を提示している以上、それは大いなる始まりであるとも考えられるのではないか。確かに、現代において、客観的「実在」や「真理」を主観がすでに知られていることを前提として経験することはもはやできない。経験として、このような主観性を主観性そのものとして問題とできるような領野がどうやったら開かれるのかを再度問い直すローティ哲学の現代的意義とは、解釈学への新たな可能性への提言にあるのではないかと本発表は考える。それを考える際には、ローティがデリダから受け継いだ思想である脱構築を解明し、ローティが脱構築をいかに自分なりに脱構築したかを追っていく必要があると考える。